# 訓練 **弟子たち**

# 会期 **9:サブミッション(5a)**

ロン・ライブリー、M.Div.、M.A.による提供 – BiblicalMentoring.org(学問)

**ステップ1**:開会の祈り

**ステップ2**: 各人が記憶の節を引用します: ヴァース: **ルカによる福音書 14:33**
***33 ですから、あなたがたのうちに持っているすべてを捨てない者は、私の弟子にはなれません。***

**ステップ3**: *聖書章の全部または一部を読んで議論してください* **– *ルカによる福音書14章***

***ステップ4:*** 個人申請やグループディスカッションのための質問:

一. このレッスンでは、服従は単なる服従以上のものであることを学びます。

二. 「私のくびきを取れ」というフレーズが、イエスが私たちにキリストの権威に従い、彼を信頼するよう招いているのがわかりますか?

三. キリストが「憎しみ」という言葉を使ったのは、自然な愛情ではなく、人が服従する権威を指していることを私たちは学ぶでしょう。

四. 私たちは、どちらの権威に従うか、夫の権威か、キリストの権威か、どちらの権威に従うかの重大な意味を示す物語を読みます。

五. 私たちは「死んだ人間」であることの意味を学ぶでしょう。つまり、自分自身に死を捧げ、キリストの中で、キリストのために生きること。祝福さえも手放す中で。

***ステップ5:*** *本の内容を読んで議論してください:*

**著者による第5章a(キース・フィリップス):**

*喜びに満ちた服従は弟子の第二のしるしです。服従は単なる服従以上のものです。それは主権的で愛に満ち全知の神への内なる信頼の態度です。ワッツ大学での最初の年、私は103丁目を3人のティーンエイジャーの友人と歩いていました。突然、一人の男が「地面に伏せろ!」と叫びました。もう一人の男が私を押し倒し、ちょうど頭上を銃弾が叫びながら通り過ぎました。私は動揺しました。身を払いながら、私は彼らに、特に後ろから発射された弾丸が発射されるとどうやって分かったのか尋ねました。そのうちの一人がにっこり笑い、「UCLAで教育を受けたのに銃のコッキング音がわからないってこと?」と冗談めかして言いました。私は彼らの専門知識に感謝し、それ以来、彼らのリーダーシップに従い、街で生き延びることを喜んで受け入れました。彼らは二度と言う必要はなかった。彼らの言葉が法律だった。私は彼らを信じていた。*

*キリストは私たちに彼を信頼するよう招いています。「疲れ果て重荷を負った者よ、私のもとに来なさい。そうすれば私はあなたたちに安らぎを与える。わたしのくびきを背負い、わたしから学びなさい。わたしは心が優しく、謙虚である。そうすれば、あなたがたの魂に安らぎが見込める。わたしのくびきは容易で、わたしの重荷は軽い」(マタイ11:28-30)。「私のくびきを取る」とは、キリストの権威に従い、彼を信頼することを意味します。服従は、キリストが弟子たちに約束された休息の前提条件です。私が車を運転し始めたとき、渋々制限速度を守りました。しかし、私が法に従う動機は信頼ではなく、恐怖でした。罰金や高い保険料を払う罰金を切られたくなかったのです。国家は、私の動機に関わらず、その権威に従うことに満足していました。*

*しかしキリストは従順だけを喜ぶのではありません。また、弟子たちに従順であり、神を信頼することを望んでいます。服従と従順には大きな違いがあります。パリサイ人は、従順なままの古典的な例を示しています。彼らは律法の文言に従いながら、神がそれを解釈しようとする霊を理解していませんでした。彼らは神の愛というより高い法則が彼らにとって異質だったため、神の裁きを信頼しませんでした。聖書もまた、従順なままの事例を記録しています。人の律法が神の律法と矛盾しても、弟子は神への信頼を公然と示すことで従順な霊を保つことができます。ペテロとヨハネは、不当な律法に不服従しながらも神に対して従順な精神を保ちました。使徒たちの権威を持つ者たちがイエスについて教えるのをやめるよう命じたとき、彼らは従うことを拒否しました(使徒行伝4:18-20)。彼らはキリストについての教えを再開し、その大胆さを祈ることさえしました。神の最高権威への服従は、世俗的な権威に逆らうことを要求しました。ペテロとヨハネは不従順を隠すことなく、公然と説教し、その結果を神に託していました。彼らは権威がそう裁くなら、さらなる罰を受ける覚悟がありました。なぜなら、公の場での服従が神に栄光をもたらすと知っていたからです。もし使徒たちが、正しいと信じる行動を「見つかった」ときに罪悪感を感じていたなら、彼らは従順な霊にはならなかったでしょう。服従的な霊と行った行為は罪を生みません。弟子が神の御心に直接従順に世俗の権威に公然と背き、ダニエルの違法な祈り(ダニエル書6:10)のように、その結果を受け入れる覚悟があるなら、彼は従順です。1960年代、多くのキリスト教徒が人種差別という不正な法律に反対する非暴力的な抗議に参加しました。彼らはすべての人間が神のかたちに創られ、尊厳こそが生まれながらの権利であることを知っていました。黒人の信者は白人のバス利用者専用の席に違法に座り、白人のレストランで大胆にサービスを求めました。彼らはより高い法に従うことで市民当局に公然と反抗しました。デモの間も、これらのキリスト教徒は罪悪感なく神に服従し、その結果を受け入れる覚悟がありました。弟子はどんな代償を払っても神の権威を信頼する態度を保とうと努めます。この追求において、四つの聖書の真理が彼を導きます。*

***キリストの権威は至高である***

*イエスは言われました。「もし誰かがわたしのもとに来て、自分の父も母も妻も子供も兄弟姉妹も憎まないなら、その人はわたしの弟子にはなれない。自分の十字架を背負わずわたしの後に来ない者は、わたしの弟子にはなれない」(ルカ14:26-27)。ここでキリストが言った憎しみとは、人が従う権威を指しており、自然な愛情に対してではありません。あなたのキリストへの服従、彼への信頼は非常に大きく、対立する権威への忠誠心は憎しみのようなものでなければなりません。キリストの権威にこれほどまでに完全に服従することは、死んだ者、つまりキリストを自分の人生の主とした者以外には理不尽です。都会の人々はしばしば対立する権威に直面します。ハティは私たちの聖書クラブの子どもたちの母親です。彼らは極度の貧困の中で暮らし、しばしば食べ物や十分な衣服も持たずに過ごしています。私たちがこの家族の身体的な必要を満たし、キリストの御名において、ハティはイエスを愛し、イエスに従うよう命じるようになりました。*

*H夫は「ラバ」、すなわちメキシコから南カリフォルニアへの麻薬運搬業者でした。彼はしばしばハティとその子供たちに手伝わせました。彼はヘロインの包みをハティの脚に縛り付け、それをドレスの下に隠していました。あるいは子供たちの服の下にそれを付けることもありました。彼は家族が従わなければ殴ったり殺すと脅したりしました。身体的虐待への恐怖から、彼らはしばしばその被害を受けていたため、従いました。ハティがキリストを受け入れたとき、彼女は深刻な危機に直面しました。彼女は自分が国の律法を破り、子供たちを危険にさらすことで神に背いていることを知っていました。しかし、夫に従うことを拒めば、その結果は恐ろしいものになるでしょう。どちらの権威が優先されるのでしょうか?彼女はキリストに服従すべきか、それとも夫に服従すべきか?イエスは疑いの余地を残さなかった。キリストの権威は至高です(マタイ23:10)。だからこそ、自らの命と子供たちの命を賭けて、ハッティはキリストに従い、「十字架」を背負い、彼に従いました。*

*神を信頼することが自分にとって何を意味するのか理解しようと苦闘しているとき、ルカ14章33節が心に響きました。「だから、まず座って自分の祝福を数え、それから私のためにすべてを捨てる者はいない」(LB、斜体は付け加えました)*

*。私が祝福を列挙したとき、妻、子ども、仕事、健康、友人、評判、家など、どれか一つが私の神になり得ると気づきました。もし神がこれらの一つまたはすべてを取り上げるなら、私は本当の危機に直面しることになると認めざるを得ませんでした。しかし神は私に、私は死んだ人間だと思い出させてくれました。そして死んだ人には所持品はありません。キリストが私の人生の主になったとき、私はこれらの祝福のすべての権利を放棄しました。今、彼はそれらを単に私に貸してくれているだけです。もし神が神の知恵によって、私が大切に思うこれらのものの一つまたはすべてを取り除くことを選んでくださるなら、私は神が最もよく知っており、私が神を喜び続けるための恵みを与えてくださると信じています。一部の信者は従順に条件付けをつけます。例えば、「神様、私はあなたのためならどこへでも行きます― ワッツ以外は」や「主よ、妻に害が及ばないと保証してくださるなら、あなたの望まれることは何でもします」といったものです。これは本当の意味で、「私はどこにも行かず、何もしません、主よ― 私が許可しない限り」ということです。私たちが神への服従に条件を設けるとき、私たちは神への信頼を完全に否定してしまいます。神に服従することについてのためらいは、私たちが神よりも自分のことを大切にできると思っている、神は私たちにとって何が最善か知らないと思い込んでいることを露呈しています。なんと愚かなことでしょう!喜びに満ちた服従でないものは、神の最高の権威、知恵、愛、そして私たちの自己死の否定です。*

*47-51a ページ*

***ステップ6**:個人的な祈りの願いを共有し、それぞれがお互いの願いを祈ります。*

出典:キース・フィリップス博士著『The Making of a Disciple』。フレミング・H・レヴェル社出版、1981年。ISBN 0-8007-1181-5。ロバート・E・コールマンによる序文。内容(勉強問題を除く)は本書から抜粋し、改訂は加えていない。

*改訂20261011*